

は蘇聯邦及び支那ソヴェト政府に對する戦争は反動戦争として反對する。我々は斷じて好戰的主戰論にくみするものでないと雖も、いまま不可避なる戦争危機をかく認識し之を國內改革との結合において進歩的なものに轉化せしめるこそ、我が勞働階級の採るべき唯一の道と信ずる。民族の利害と勞働階級の利害とを反撥せしめるのは誤謬である我々は日本のブルジョアジーが日本を永くアジアの憲兵たらしめ、歐米資本と共同してアジア諸民族を搾取せんとするを排斥する。同時にコミンタインが蘇聯邦の目前の利害の見地から日本共産黨に向つて無暗矢鱈に敗戦主義を課してゐるのは日本の勞働階級にとつて有害であることを力説する。支那軍閥や米國に敗戦する必要はどこにもない。腐敗の極に達してゐたツァーリズムのロシアに於ては兒童走卒も自國の敗戦を希望した。あらゆるロシアの經驗を時處と條件を無視して普遍的教義に轉化するのにはコミンタインの根本的誤謬の一つであるか、今日の日本は當時のロシアに比して遙かに健全であり遂に文化高く、

原始的な敗戦主義は決して大衆の胸に訴へ得ない。日本が敗退すればアジアが數十年の後退をすることは目に見えて居る。日本に於ける敗戦主義は日本民族の敗北の希望を意味し得る。我々は大衆が本能的に示す民族意識に忠實であるを要する。勞働階級の大衆は排外主義的に昂奮してゐるのでない。彼等は不可避に迫る戦争には勝たざるべからずと決意し、之を必然に國內改革に結合せんと決意してゐる。之を以て大衆の意識が遲れてゐるからだと片付けるのは大衆を侮辱するのみならず、自ら天に唾きするものだ。

我々はコミンタインが日本共産黨に向つて要求する公式的な殖民地民族の國家的分離政策が日本において妥當ならざるを指摘する。コミンタインの民族自決の原則は、民族の牢獄と呼ばれたツァーリズムのロシアにおいて、之を認めざれば二十有余の諸民族の叛亂によつてロシア革命そのものゝ成功を不可能ならしめるものなりし故に成立した